【北海道広尾町広尾集落協定】

地域が一体となった担い手対策「農活チャレンジ応援事業」で町に活力を

○担い手不足に行政や集落協定、関係機関が協力して対策を実施する体制を構築
○「広尾町農活チャレンジ応援事業」を創設し、就農体験・受入プログラムを作成

集落の課題

担い手対策体制の未整備

・高齢化、後継者不在に加え、新型コロナウイルス感染拡大が労働力不足に拍車
・外部からの人材受入にあたり、関係機関一体となった体制が未整備
・体験・研修受入の体系化されたプログラムがない

取組内容

受入体制の構築と農活チャレンジ応援事業の創設

・町内の関係機関が一体となって農業体験希望者等、外部人材を受け入れる体制を構築
・研修受入のため農活チャレンジ応援事業を創設し、段階に応じた受入プログラムを作成
・宿泊可能な研修施設を整備（町予算）
・令和６年度までに延べ50名の受入を目指す

【研修施設】

取組の成果

体験参加者延べ26名

・R3.8から農業体験の受入を開始し、大学生を中心に初年度目は16名が参加
・R4は、リピーターも含め10名が参加（10月現在）
・これまで関心のなかった農家も受入に協力

○事業開始後の体験参加者数

年度	人数
R3	16名
R4	10名(10月現在)

【農業体験研修】

取組地域の概要

○位置

○地域の概要
・北海道十勝地方の最南端に位置する、農林水産業が基幹作業の町。農業は酪農主体で乳牛１万１千頭を飼養。
○主要作物
・酪農、畜産、てん菜、

広尾集落協定の概要(R3現在)
面　積：3,600ha(草地)
交付金額：5,600万円
（個人配分22%、共同取組活動78%）
構成員：農業者101人
（うち農業法人28法人）
協定開始：平成12年度

1　集落の概要

豊かな自然の中で、安全で高品質な農畜産物の生産に取り組む酪農地帯

――地域の概要を教えてください

広尾町は北海道十勝地方の南端に位置し、東は太平洋に面し西は日高山脈の山並みがそびえる豊かな自然を生かし、農林業と漁業を基幹産業として発展してきた町です。日本で唯一、サンタクロースの故郷ノルウェー公認の「サンタランド」としても有名です。

農業は酪農が主体で、乳牛約1万１千頭を飼養しています。町の耕地面積6,190haの多くが牧草地ですが、一部てん菜、馬鈴しょ等の畑作物生産も行われています。

中山間直払制度は平成12年度から活動を開始。町内一円を範囲とする広尾集落では、草地比率の高い草地3,600ha、集落構成員101名で活動しています。令和3年度からは集落機能強化加算の取組を開始しました。

【冬の広尾】

2　集落の抱える課題

高齢化、後継者不足に新型コロナ拡大が労働力不足に拍車をかける

――集落にはどのような課題がありますか？

生産者の高齢化や後継者不足です。平成10年には137経営体ありましたが平成29年には98経営体、令和３年には約70経営体、さらに廃業を検討している経営体も十数経営体いる等、担い手不足が深刻化しています。そこに新型コロナウイルスの影響で、外国人技能実習生が来日できないといった事情も重なり、労働力不足に拍車をかけました。このため、これまで取り組んでこなかった担い手対策に本腰を入れることとしました。

3 取組の経緯

次の世代が希望を持てる強い農業、美しく活力のある農村の創出を目指す

――集落機能強化加算の取組を開始した経緯を教えてください

これまでも、協定の構成員から将来の不安を払拭するため、担い手対策に力を入れるべきという声が度々あがっていましたが、予算もなく手をつけられずにいました。第５期対策で集落機能強化加算が創設されたことを契機に、この加算をうまく活用して担い手対策に具体的に取り組もうと話が進みました。

これまで町内では「広尾で酪農どうでしょう」というＪＡや一部生産者で組織する団体が、大学生との交流や農業体験受入れの取組を行っていました。この取組もベースにしながら、近隣の先進地へ担い手対策の事例調査を行い、広尾のスタイルを検討していきました。

4 取組の内容

協定も協力し「広尾町農活チャレンジ応援事業」を創設し、関係機関の協力で研修プログラムを作成

――具体的にはどのようなことに取り組んだのでしょうか

まずはソフト面ですが、町内一体となった受け入れ体制を構築しようと、協定も協力して関係機関と協議を重ね、令和３年度から「広尾町農活チャレンジ応援事業」という事業を立ち上げました。町内で農業を体験したい方から就農に向けて本格的に実習したい方まで幅広く受け入れるため、ステップ１～３に分け体系化した農業体験のプログラムも作成しました。事業主体は広尾町農業推進協議会となっており、ここに集落協定をはじめ多くの関係機関が参画する形をとっています。

プログラム作成には集落協定のほか、町やＪＡ、農業改良普及センター、ＮＯＳＡＩ、近隣の乳業メーカー等多くの機関が協力して関わることで、詳細なプログラムが出来ました。協定参加者を始めとする受入側の経営形態（個人、法人、コントラ組織等）により異なるプログラムの体験が可能となっています。

また、先んじて大学生の受け入れを行っていた「広尾で酪農どうでしょう」とは、一部内容が重複していることから、参加者が混乱しないよう新しい事業に一本化するなどの調整も行いました。

ハード面では、参加者のための宿泊研修施設の整備も行われました。町の予算で、ＮＰＯ法人が使用していた古い林業振興センターの建物を宿泊できるよう改修し、令和３年８月から利用を開始しています。外観はかわいいホルスタイン柄で、建物内部には町産木材が使われています。座学を行う広いスペースがあり、つなぎや長靴等も完備され、参加者専用施設として利用しやすいよう工夫されています。

【宿泊研修施設】

集落協定が大きく担うのはソフト面の整備や受入です。事業の仕組みづくりやカリキュラム作成には集落協定も構成団体として参画し積極的に発案する等、関係機関が協力しあうことで、連携も深まり事業推進の機運が高まったと感じています。

5 取組の成果

施設改修後に研修受入開始

――体験開始してみて反響はどうですか？

受入プログラムは３段階。ステップ１は１ヶ月以内の体験研修、ステップ２は３ヶ月～１年以内の実践研修、ステップ３は２年以内の就農研修となっています。令和３年度は、宿泊研修施設の改修が終わった８月から受入を開始しましたが、新型コロナ拡大もあり長期の受入は断念。ステップ１の体験のみの受入となりましたが、大学生を中心に16名の参加がありました。

令和４年は10名ほど受入を終え、現在、長期研修の希望もあります。（令和4年10月現在）

参加者にアンケートをとっていますが感想はどれも好評です。昨年体験に参加し、今年は別の経営形態へ再び参加するなど、リピーターとなってくれた参加者もいて嬉しい限りです。

受入側ですが、これまで体験受入に関心の薄かった生産者も徐々に興味を持つようになり、今では20戸程度が受入をしています。受け入れる側の意識も変わってきたと感じています。

～**参加者**の声～
想像以上に農家の方々がお世話してくださり、いい研修ができました。農家さんにとっては日常の一部かもしれないけれど、本当に様々なことを学ぶことができました。

～**参加者**の声～
自分が普段何気なく飲んできた牛乳が、毎日の地道で大変な作業に支えられて作られているということを実感しました。

6 制度の活用方法、工夫

関係機関の連携でスムーズに役割分担

――中山間直払制度や地域の人材はどのように活用しましたか？

町の予算でハード面を整備し、中山間直払の加算金を活用しソフト面を充実させる等、費用面でもスムーズに役割分担できました。体験受入時には、農場の衛生対策はもちろん、新型コロナ感染対策にも気を遣いますので、必要な衛生対策資材にも加算金を活用でき大変助かりました。今後は、加算金を活用してもっと体験学習の内容を充実させたり、座学に必要な学習機材を整備する予定です。

機能面でも、町が事務局として全体調整を行い、集落協定、ＪＡが主にプログラムに基づく指導を担うなど、役割分担を図って進めています。

地域の人材としては、広尾町農業推進協議会の構成機関の他にも、地域おこし協力隊の方に町のサイト等ＳＮＳを使って制度のＰＲをしていただいたり、仕事の合間を縫って受入スタッフとしてもお手伝いいただいています。

――苦労した点があれば教えてください

取組自体はスムーズに進んでいますが、当初は受入にあまり関心のない生産者にどう振り向いてもらうか悩みました。事業化して、周囲で受入をしている農場の様子を目にすることで、具体的にイメージすることができたのか、受入にチャレンジしてみようという生産者も少しずつ増えています。今では、約20戸の生産者が受入を行っています。将来もっと増えると嬉しいですね。

【就農体験研修】

7 集落の今後の目標

農業を支える多様な人材の確保や活躍を促し、地域コミュニティの向上と地域農業の振興を

――今後の目標を教えてください

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、長期研修の受け入れが出来ていないため、早く長期研修を受け入れたいです。目標は第５期対策中に体験研修や長期研修で延べ50名を受け入れることです。

受入だけでなく、実際就農に至った場合の環境整備も重要です。酪農の新規就農はとにかく初期投資が大きいことがネックです。タイミングや条件が合致して、居抜きで経営移譲できればいいのでしょうが、なかなか難しいです。

町内には、ヘルパー組合やコントラ組織、農業法人への就職等の選択肢もあるので、自分で経営することに拘らない農業従事ということも可能です。多様な選択肢を提示して、就農しやすい環境づくりもできると良いと考えています。

生産者同士や、異業種の方との連携も深めていきたいです。町内には自家生乳を使ったチーズやジェラートの製造を手掛ける生産者もいますし、様々な形態の生産者と連携して情報を発信したり、広尾の農業の魅力をもっと知ってもらうことで、都市農村交流の取組へ発展させる等、地域農業の振興、町の活性化につながればと期待しています。

【搾乳体験】